ヤスクニ通信　No.197　2016 年 2 月 19 日
発行　靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い（略称「つどい」）　代表・西川重則　TEL/FAX　042-574-9210
事務局　西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付　HP　http://yasukuninotsudoi.christian.jp/
例会　毎月第3金曜日　7:00～9:00pm（祝日の場合第 4 金曜日）
会場　たんぽぽ舎 TEL 03-3238-9035　FAX 03-3238-0797

ヤスクニ・レポ　197

改めて歴史の事実に基づく歴史の認識の共有を

代表　西川重則

1

二〇一六年の〈二・一一〉集会は石川県の金沢市内での KGK（キリスト者学生会）の主催で行なわれた。関連集会は二月一二日から始まり、一四日の主の日まで毎日開かれるという異例の集会となった。第一日目の場合は、久しぶりに KGK の主催であり、なつかしい思いに包まれた。久しぶりというのは、私が大阪での KGK 主催の集会の講師であり、何十年前の集会であった。今回も熱心な KGK の方々によるよく準備された集会となり、三〇名の参加者と言われていたが、一般の人々も多く参加され、六〇名ほどとなった。

私は講師の立場であり、初めてお目にかかるキリスト者の学生にどう対応したらよいか、戦後七一年の厳しい政治状況を知っているだけに、今後の課題として、二一世紀を担う若い世代への遺言のつもりで準備をし、むずかしい話ではなく、わかり易く、ていねいに、歴史の事実に基づく日本のあるべき姿を具体的に報告し、戦争の時代を知らない若い世代に、戦争がありうる今後の課題をどう考え、どう取り組むべきか、真剣に考え、準備したものである。

その結果、参加者一同の感謝の思いを直接聞くことができ、私自身予想できなかった大きな喜びを与えられた。

言うまでもなく、私の講演は常に、長期にわたって行なったアジアに対する侵略・加害の想像を絶した被害者の苦しみを具体的に実例を挙げながらの報告をし、一般の方々が持っていない資料を提供して、若い世代の心に刻んでいただくために、よく考え、学びを深める努力をした。

テーマは「アジアの視点に立って、わたしたちの責任を考え学び合う」であり、タイトルにふさわしく、講師の私を含めて、共に日本人として、アジアの視点に立って、ひとりびとりの責任を考えるということは、今日絶対に忘れてはならない不可避の課題であり、年齢を問うことなく老いも若きも共に真剣にアジアの視点に立った認識をし、そうした思いにふさわしい対アジアの諸問題を解決しなければならないことを強調した。

私が準備した資料のひとつは、私が中国に訪問した二〇一一年の一二月三〇日に、日本の海軍航空隊による大都市の戦略無差別大爆撃の跡を直接見ながら、日本人として深い反省による心からの謝罪の思いを心に抱いての訪中の日にあって、思いがけなく、私を知っている画家の陳可之さんが遠い都市から来られ、会うや否や私と握手をし、私を抱きしめた陳可之さんが、「よき友よ、西川さん」と感激の思いを示してくださった。私はその事実を忘れることなく、その時あっと言う間もなく写真をとってくれた友人によって今もなお私が大事にしている写真を訪中の経験がない若い KGK の学生に見せ、その時の私たちの出会いの喜び、その背景を語った。

皆さんには報告したことがあるが、私が最初に訪中の旅をし、重慶に行き、被害者の方々に出会い、何度謝罪の思いを伝えても信じてくれず、侵略・加害の日本人の戦没者遺族として全然信頼されなかったものである。

2

なぜなのか。その歴史・要因を正確に認識するためには、日本による侵略・加害の実態を正確に学び、心からの謝罪の思いを持った日本人が心から歴史の事実に基づく歴史の認識と謝罪とが一体関係となり、被害者の心を動かす以外に先に挙げた陳可之さんのような対応を期待することは不可能であることを改めて知らねばならない。

つまり中国人の言う「平和は愛が伴う」のであって、戦後七一年の今日、安倍内閣始め国会議員、公務員その他日本のあり方を真剣に考え、対中国問題の平和実現をめざす具体的な対応はどうあるべきかについて真剣に考え、学び合うことがどれほど重要

かということである。

したがって、戦後七〇年の昨年の九月一九日の真夜中の国会の出来事、すなわち日本国憲法下の憲法政治に責任を持っている為政者とくに内閣の在り方を直視する時、私たちにはあり得ない、いわゆる戦争法案の強行採決による法案の成立などを当然視する内閣のあり方について、中国始め韓国その他のアジアの国々が納得するはずがないと言うべきであろう。まして、北朝鮮、中国、韓国に対する長い侵略・加害の歴史を心から反省し、私たちが心から願っている平和の実現、愛の伴う外交が見られない日本の現状に期待することは不可能と言うべきである。

しかも、私がしばしば反省の意味で発言している対華二一カ条の要求（一九一五年）の対中国への差別に満ちた対応を忘れていない中国にとって、その後続いた一九三一年九月一八日の旧満州事変、そして一九三七年七月七日の支那事変、そして南京大虐殺の後の遠い重慶大爆撃その他多くの加害の事例に対して、安倍首相がたとえば、二〇一五年の戦後七〇年談話、あるいは今年の施政方針演説、その他国会での質問に対する無責任な答弁など、どの場合も、心からの謝罪の思いが感じられない現状！

一方、現天皇がしばしばパラオその他に行き、たとえば「先の大戦によって命を失ったすべての人々を追悼し、遺族の歩んできた苦難の道をしのび、世界の平和を祈りたいと思います」といった素晴らしい追悼の思いが述べられていることは十分に評価できる(「朝日新聞」、二〇一五・四・四、参照)が、私が今回 KGK の若い世代の方々、参加された大人の方々に訴えたことは、歴史の事実に基づく歴史認識の共有の努力なしには、侵略・加害を長きにわたって行なったために強いられた悲惨な言葉に表わせない被害者の思いを具体的に認識し、謝罪の思いが容易に伝わらないと思われることを知って欲しいことだった。

つまり天皇が何度追悼の旅をくり返しても、私が心から願っている、天皇の父である「昭和天皇」の最高の戦争責任に一切触れないのは一体なぜなのか。戦争責任とは悲惨な戦争を起こしたこと、その内容であり、その最重大な最高の責任者「昭和天皇」の戦争責任になぜ触れないのかを強く批判して終わりたい(二〇一六・二・一五)。

２０１６年１月１５日例会奨励　マタイの福音書５章９節「平和をつくる者たちは幸いです」

村瀬　俊夫牧師　（日本長老教会　武蔵中会教師）

昨 2015 年は戦後 70 年の節目に当たる年だった。86 歳の私は幼少から思春期にかけて戦時を体験し、戦後の 70 年を生きてきた。戦前と戦後を比べれば、戦争に明け暮れた戦前よりも、平和に彩られた戦後が断然よい。多くの人が無惨に殺される戦争の悲惨と残酷は、昔も今も変わらない。戦後 70 年、日本が戦争を放棄した平和国家として歩んできたのは稀有の事態であり、世界に誇るべきことであろう。

旧約時代のイスラエルも、強大な諸外国に囲まれて戦乱が絶えなかった。北王国は前 721 年にアッシリアに滅ぼされ、住民(10 部族)の多くが捕囚民として各地に散らされた。そんな前 8 世紀末に南王国で預言者として召されたイザヤは、期待と希望が次々と裏切られる中で、終わりの日の奇跡的な平和の実現を待ち望む者とされ、2:2-4 の預言を書き残した。この終わりの日のメシア到来と平和実現への期待は、イエス･キリストによって成就した、と私たちは信じる。「平和をつくる者たちは幸いです。その人たちは神の子らと呼ばれるのだから」(マタイ 5:9)と言われるイエスご自身が、「平和をつる者」として、地上に神の国をもたらそうとしておられる。それと関連するエペソ 2:14-17 の言葉も、心に留めたい。

イエスは敵意を十字架によって葬り去り、廃棄された。そのイエスが復活の主として来られ、「平和」を福音してくださっている。その最も鮮明な形が、戦後の日本を導く最高法規となった日本国憲法(特に前文と第 9 条)に示されている。この憲法を日本国民が確定したのは、政府によって引き起こされた過去の戦争の惨禍を二度と繰り返すことをしないという、歴史と向き合った真摯な反省と謝罪の精神からである。私たちはイザヤ 2:2-4 の預言の成就を日本国憲法に内に見る。日本国憲法の精神を為政者に守らせ、この精神を世界に及ぼすことが、「平和をつくる者たち」の崇高な使命である。